

# 柔道試合における「極り技」の傾向性について

金田 一 芳 美

Some Tendencies in Winning Tricks in Judo Bouts

Yoshimi KINDAICHI

## I はじめに

### (1) 研究の目的

柔道においては、その内容が多種多様であって、競技柔道の技のほかにも多くの技があり、練習方法にしても乱取・試合だけでなく、「形」の練習を通して学ばなければならない精神・技術面の深さがあり、柔道試合の「極り技」においてもきわめて多いところから、ここでは、試合における「極り技」にのみ限って取り扱うことにする。それぞれの技は、幾多の条件、即ち体格・体力・年齢・人種的差異・審判規定・試合時間・試合場等に制限されながら現われるだろう。従って本研究は、昭和20年以後の全国的な柔道試合時の記録等によって「極り技」の区分や、具体的な内容を把握し、それらについて考察し、柔道指導への方向性と技術指導の基礎を一応確立しようとするものである。このことについて、関係者は等しく興味を持っていることであろう。何故ならば、このことが、技の選択を考える上に直接関係ある問題であるからである。なお、今回の調査・研究では、上記の幾多の条件等の資料蒐集の点において、調査範囲が余りにも広範囲であるため困難さがあり、また、不十分になり兼ねないと考えられた。そこで今回は、試合成績記録だけによって、「極り技」の傾向を把握することにとどめた。

### (2) 調査研究の資料内容と整理方法

昭和25年以降、昭和46年までの全国的な試合成績のうち、つぎのイ)・ロ)・ハ)の結果を基にしたが、長期間であるので適当な年度別区分をすることが、比較検討するのに時代的な特色がみられる。しかしながら、今回の調査研究では、その方法を採用しないところに「極り技」の傾向性把握上に多少の問題が残ることも考えられる。ところがこの度は、試合種別区分をとらえながら一括整理検討することにした。

また、昭和20年以前の「極り技」の傾向とも比較検討し、試合審判規定の改正前後の「極り技」等の傾向に、どのような相異がみられるかについても検討することにした。

#### イ) 国民体育大会

##### A) 一般の部(都道府県対抗)

第5回(昭和25年)から第24回大会(昭和44年)までは決勝試合の資料<sup>1)</sup>・第25回(岩手国体)<sup>2)</sup>・第26回(和歌山国体)<sup>3)</sup>大会は、全試合の記録をそれぞれ資料とした。

##### B) 教員の部(都道府県対抗)

第14回(昭和34年)から第24回大会までは決勝試合だけの資料<sup>4)</sup>・第25回<sup>5)</sup>・26回<sup>5)</sup>大会は

全試合記録をそれぞれ資料とした。

C) 高等学校の部(都道府県対抗)

第5回(昭和25年)から第24回(昭和44年)までは決勝試合を資料<sup>7)</sup>とし、第25回<sup>8)</sup>・26回<sup>9)</sup>大会は全試合の記録をそれぞれ調査対象とした。

ロ) 全国学生大会

(学生優勝大会・学生選手権大会)

昭和30年から44年までの決勝試合のみの資料<sup>10)</sup>を、選手権大会は準決勝からの資料<sup>11)</sup>を対象とした。但し年度により多少の違いがあることを念のため附記しておく。

ハ) 全国高等学校大会(学校対抗)

第1回(昭和27年)大会から第20回大会(昭和46年)までは、団体戦、個人戦共全試合の記録<sup>12)</sup>を資料としたが、個人戦の場合でも体重別制を区分検討せず、一括整理したことは、国民体育大会一般の部の体重別制を区分検討しないことと同様である。なお、整理方法は、各資料の集計整理に筆者があたった。

## II 結果と考察

柔道試合に使用し得る投技・固技には、技数がはなはだ多い。特に、投技は多様であって、

第1表 勝負の分類と頻度(総合)

分類 試合種別	総計	投技	固技	合せ技	優勢勝	総合勝	引分 (%)	不戦勝	反則負
全国高等学校会 柔道大会	8,920	2,752	1,004	652	1,864	3	(28.9) 2,579	63	3
国体(高校) 第5回—第24回	87	35	11	2	13	0	(28.7) 25	1	0
岩手国体	151	39	12	9	42	0	(32.4) 49	0	0
和歌山国体	165	39	16	6	31	1	(43.0) 71	1	0
計	9,323	2,865	1,043	669	1,950	4	(29.2) 2,724	65	3
一般・教員	712	157	36	33	171	0	(43.5) 310	5	0
大学 国体戦	106	29	5	2	13	0	(53.8) 57	0	0
大学 個人戦	76	37	3	0	35	0	0	1	0
計	182	66	8	2	48	0	(31.3) 57	1	0
総計 (%)	10,217	(29.4) 3,088	(10.6) 1,087	(6.9) 704	(21.2) 2,169	(0.04) 4	(30.2) 3,091	(0.7) 71	(0.02) 3

註 1) 国体の「一般」は第5回—24回まで、「教員」は第14回—24回までの集計である。

2) %は小数点第2位を4捨5入した。

3) 勝負がついた試合は7,126(79.7%)であるが本文には、小教点第1位を4捨5入して記述した。

第2表 勝負の分類と頻度（大学・教員・一般）

	総計	投技	固技	合せ技	優勢勝	総合勝	引分 (%)	不戦勝	反則
一般・教員体	712	157	36	33	171	0	(43.5) 310	5	0
大学体戦	106	29	5	2	13	0	(53.8) 57	0	0
大学個人戦	76	37	3	0	35	0	0	1	0
大学計	182	66	8	2	48	0	(31.3) 57	1	0
総計 (%)	894	(24.9) 223	(4.9) 44	(3.9) 35	(24.5) 219	0	(41.1) 367	(0.7) 6	0

- 註 1) 表1から別表にしたもの  
 2) 抽選勝(9)・判定勝(12)を優勢勝に含めた。  
 3) %は小数点第2位を4捨5入した。

第3表 勝負の分類と頻度（高校の部）

	総計	投技	固技	合せ技	優勢勝	総合勝	引分 (%)	不戦勝	反則
全国大会1-20回	8,920	2,752	1,004	652	1,864	3	(28.9) 2,579	63	3
国体(決勝のみ)	87	35	11	2	13	0	(28.7) 25	1	0
岩手国体	151	39	12	9	42	0	(32.5) 49	0	0
和歌山国体	165	39	16	6	31	1	(43.0) 71	1	0
計 (%)	9,323	(30.7) 2,865	(11.2) 1,043	(7.2) 669	(20.9) 1,950	4	(29.2) 2,724	65	3

- 註 1) 表1から別表にしたもの  
 2) %は小数点第2位を4捨5入した。  
 3) ( )内の数字は%である。

種々の技が複雑に応用変化されて用いられるから、実際に用いられる技数は、数十<sup>13)</sup>に及ぶであろうともいわれている。投技・固技の解説で、磯貝一氏<sup>14)</sup>は、投技41種・固技27種、小田常胤氏<sup>15)</sup>は、投技55種・固技118種を、大滝忠夫氏<sup>16)</sup>は、投技76種・固技26種を、工藤一三氏<sup>17)</sup>は、投技51種・固技21種を、小谷澄之氏<sup>18)</sup>は、投技39種・固技19種とかなり技の数で差がみられるが、各々実用的なもの、あるいは、ある発達段階を対象とし、それに応じて適当と考えられるものだけを解説されたものとも考えられるものもある。しかし、それから判断しても、これ以上に創意工夫がなされているものと考えられる。従って、これら数多い技の中で試合における「極り技」の一般的な傾向を把握するために、昭和25年～46年までの前記各試合における記録を基にして、総合集計して得た結果が、表1であり、高校・大学・一般（含教員）別に集計して得た結果が表2・3である。

## 1) 「極り技」の範囲と頻度

表1によれば、10,217試合のうち、約70% (7,162本) がなにか個有の技、その他で勝負が決し、他の約30% (3,091本) は「引分」となっている。勝負のついた内訳をみると、投技で勝負のついたものが29.4% (3,088本)、固技で勝負のついたものが10.6% (1,087本)、具体的な技名が記録されていないが優勢勝21.2% (2,169本)、不戦勝0.7% (71本)、合せ技6.9% (704本)、反則勝0.02% (3本)、総合勝が、僅か0.04% (4本) である。投技、固技の関係を今回の結果からみると、「3対1」ぐらいの関係にあり、投技が中心であることが知られる。これは現行の試合規定が、立技から始めることになっており、且つ投技を主体にしてなされていることからして当然の結果といえよう。また、「優勢勝」の21.2%が、投技で勝負がついたものの29.4%に接近し、固技で勝負がついたものより2倍に近い高率を示している点は、興味ある現象である。また「合せ技」6.9%については、「優勢勝」と同様に具体的な技名の記録がないので、平素の練習でどんな技に力を入れて練習がなされているかの傾向を、把握する資料にはならなかった。

また、今回の結果の表1と昭和20年前の資料による表4<sup>19)</sup>とを比較してみると、勝負のつ

第4表 昭和20年以前の「極技」の頻度と分類

(1)	試合総数 10,552試合 (昭和23年8月調べ)			
	試合の名称	試合数	試合の名称	試合数
	天覧試合	375	東京学生連盟試合	604
	明治神宮大会	2,722	地方対抗試合	406
	宮崎神宮大会	37	日満交歓試合	88
	樫原神宮大会	35	学生試合	362
	全日本選手権大会	272	済寧館試合	149
	講道館試合	5,171	終戦後の試合	330
(2)	(イ) 勝負がついた試合	8,772	83%	
	(ロ) 引分けとなった試合	1,780	17%	
(3)	勝負がついた試合の内訳 (8,772試合)			
	(イ) 投技で勝負がついた	5,617	64%	
	手技	683	12%	
	腰技	1,523	27%	
	足技	2,850	51%	
	捨身技	145	3%	
	返技	416	7%	
	(ロ) 固技で勝負がついた	1,464	16%	
	抑込技	984	67%	
	絞技	338	23%	
	関節技	142	10%	
	(ハ) 合技で勝負がついた	631	7%	
	(ニ) 判定で勝負がついた	835	10%	
	(ホ) 抽選で勝負がついた	225	3%	

註 1) 総試合数 10,551の中に昭和20年後の試合数 330が含まれている。

いたパーセントで今回70%・昭和20年以前83%、「固技」で勝負のついたもの今回10.6%・昭和20年以前16%、「優勢勝」では今回21.2%・昭和20年以前10%（判定で勝負がついたもの）、「合せ技」ではそれぞれ6.9%・7%であるが、「優勢勝」・「合せ技」を除いては、今回の調査結果がいずれも昭和20年以前の調査結果より下まわっている。

今回の調査結果の「優勢勝」の21.2%に対して、昭和20年以前の10%という現象をみる時、審判規定の「技有りに近い」優勢判定の規準に改正した趣旨が、十分生かされたものと考えられ、興味が持たれる現象である。ただ今回の調査結果の「引分」30.2%に対し、昭和20年以前が17%であって、今回が逆に大きく上まわっている。この現象は特に注目したい点であるのでとりあげて分析したい。

「引分」となった試合数について、高校、大学、教員・一般別に細部について、作成した表2・3から検討してみると、高校全体（含国民体育大会）としては29.2%であるが、岩手国体では32.5%、和歌山国体では43%で、国体時が高率で、特に和歌山国体が目立っている。

つぎに、大学の部をみると団体戦（学校対抗）で「引分」54%の最高のパーセントを示し、教員・一般では大学程ではないが、43.5%と大部高率である。

全体として「引分」数を高くした要因と考えられるものに、1つは今回の調査資料は昭和20年以前の資料に比較して、学校対抗、都道府県対抗等の団体試合が多かったこと、第2として大学の部の勝負の判定規準が、他の試合の場合と異なる試合方法や、歴史的に古い選手権試合に伴う作戦等の内容からくる試合者の心的態度が「引分」数を多くしたのか、第3に技倆が伯仲していたためか等が考えられるが、第3については、判断の資料（即ち段級・練習量・試合経験・体格・体力等）持っていないので以降はふれることはさけない。

しかし、いずれにしても柔道が格闘技であるという本質から、出来る限り「引分」をなくして勝負を決定させるべきであるとする試合に対する考え方が、「技有り」優勢から、「技有りに近い」優勢判定の基準に規定が改正された点から見ても、今回の調査結果の「引分」の高率な現われ方が、前述のような要因があるにしても、理解に苦しむ点である。

柔道試合の興味（観衆も含めて）の発展という観点から、試合を進行する審判員は、規定適用の基準を改正の精神で厳守することは勿論であるが、試合者に対しては、試合についての適切な指導と審判規定の研究を深めさせ、あるいは審判規定の何等かの改善策がない限り、今回の調査結果から見ると、柔道試合を通しての柔道に対する興味の発展は、余り大きく期待出来ないのではないかと考えられ、熟考を要する重大な問題であろう。

## 2) 「極り技」の分類と頻度

ここでは具体的な技の内容と、その現われ方を把握しようとするものである。

### 1) 投技について

「極り技」の名称を、頻度の多いものから順に整理すれば表5のようになる。但しこの中には、手技、腰技というように個々の技の名称でないものも含まれている。

表5によると、如何なる技が試合に多く使用されているかが、おおよそ知ることができる。即ち「極り技」34種の中で「内股」・「大外刈」・「背負投」・「跳腰」・「払腰」の順に多く、また学校別に区分したものが表6・表7であるが、前述した各氏の技の解説数に及ばないが、大部数多い技が使用されている。

第5表 投 技 の 分 類 と 頻 度 (総合)

技名	試合種別 全国柔道大会 全国高等学校	国 体	岩 手 国 体	和 歌 山 国 体	計	一 般 ・ 教 員	岩 手 国 体	和 歌 山 国 体	計	大 学	総 計		順 位
											2	3	
総 数	2,752	35	39	39	2,865	50	58	49	157	66	3,088	-	
内 股	573	5	6	6	590	8	15	9	32	12	(21) 634	1	
大 外 刈	341	6	1	9	357	2	4	5	11	13	(12) 381	2	
背 負 投	327	3	4	6	340	6	3	3	12	2	(11) 354	3	
跳 腰	199	3	2	1	205	4	3	3	10	1	(7) 216	4	
払 腰	156	2	0	6	164	4	4	9	17	6	(6) 187	5	
釣 込 腰	149	0	0	1	150	5	1	1	7	2	(5) 159	6	
大 内 刈	146	3	0	1	150	0	1	1	2	3	(5) 155	6	
返 し 技	150	2	0	0	152	4	0	0	4	5	(5) 161	6	
体 落	109	0	1	1	111	1	5	1	7	7	(4) 125	7	
小 外 刈	92	0	0	1	94	0	1	3	4	2	(3) 107	8	
小 外 掛	53	0	1	0	65	2	2	0	4	3	(3) 78	8	
大 外 落	53	4	6	2	65	4	5	3	12	1	(3) 78	8	
出 足 払	73	0	0	1	74	0	0	0	0	1	(2) 77	9	
送 足 払	73	0	0	0	74	0	2	0	2	0	(2) 77	9	
払 卷 込	62	1	7	0	70	1	2	1	4	3	(2) 77	9	
大 外 卷 込	46	0	4	1	51	1	3	2	6	2	(2) 59	9	
小 内 刈	60	1	1	3	65	0	2	1	3	0	(2) 68	9	
跳 卷 込	35	0	2	0	37	0	0	0	0	1	38	-	
移 腰	36	0	0	0	36	1	0	1	2	0	38	-	
支 釣 込 足	25	1	0	0	26	3	1	0	4	0	30	-	
大 腰	18	0	1	0	19	0	1	1	2	1	22	-	
巴 投	16	2	0	0	18	1	1	2	4	0	22	-	
後 腰	20	1	0	0	21	0	0	0	0	0	21	-	
す くい 投	15	1	1	0	17	1	1	0	2	0	19	-	
す かし 投	15	0	0	0	15	1	0	1	2	0	17	-	
肩 車	11	0	1	0	12	0	1	1	0	0	12	-	
双 手 刈	10	0	0	0	10	0	0	0	0	0	10	-	
払 釣 込 足	3	0	0	0	3	1	0	1	2	1	6	-	
浮 腰	5	0	0	0	5	0	0	0	0	0	5	-	
谷 落	2	0	1	0	3	0	0	1	1	0	4	-	
足 車	3	0	0	0	3	0	0	0	0	0	3	-	
裏 投	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	-	
朽 木 倒	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	-	
膝 車	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	-	

- 註 1) 全国高校大会 1回—20回までとする。  
 2) 高校の国体の部 5回—24回までとする。  
 3) 教員国体の部 14回—24回  
 一般国体の部 5回—24回までとする。  
 4) 大学の部は 182 試合の集計である。

第6表 投技の分類と頻度(学生・教員・一般の部)

技名	試合種別	一般の部	岩手国体	和歌山国体	計 (%)	順位	大		順位	総計 (%)	順位
							(%)	学			
教 総		50	58	49	157	-	66	-		223	-
内 股		8	15	9	(20) 32	1	(18) 12	2		(20) 44	1
大 外 刈		2	4	5	(7) 11	4	(20) 13	1		(11) 24	2
払 腰		4	4	9	(11) 17	2	(9) 6	4		(10) 23	3
背 負 投		6	3	3	(8) 12	3		2	7	(6) 14	4
体 落		1	5	1	(4) 7	6	(11) 7	3		(6) 14	4
大 外 落		4	5	3	(8) 12	3		1	8	(6) 13	4
跳 腰		4	3	3	(6) 10	5		1	8	(5) 11	5
釣 込 腰		5	1	1	(4) 7	6		2	7	(4) 9	6
返し 技		4	0	0	(3) 4	8		5	5	(4) 9	6
大 外 巻 込		1	3	2	(3) 6	7		2	7	(4) 8	6
払 巻 込		1	2	1	(3) 4	8		3	6	(3) 7	7
小 外 掛		2	2	0	(3) 4	8		3	6	(3) 7	7
小 外 刈		0	1	3	(3) 4	8		2	7	6	8
大 内 刈		0	1	1	2	-		3	6	5	-
巴 投		1	1	2	(3) 4	8		0	-	4	-
支 釣 込 足		3	1	0	4	8		0	-	4	-
大 腰		0	1	1	2	-		1	-	3	-
小 内 刈		0	2	1	3	-		0	-	3	-
払 釣 込 足		1	0	1	2	-		1	-	3	-
送 足 払		0	2	0	2	-		0	-	2	-
移 腰		1	0	1	2	-		0	-	2	-
すかし 技		1	0	1	2	-		0	-	2	-
すくい 投		1	1	0	2	-		0	-	2	-
出 足 払		0	0	0	0	-		1	-	1	-
跳 巻 込		0	0	0	0	-		1	-	1	-
谷 落		0	0	1	1	-		0	-	1	-
膝 車		0	1	0	1	-		1	-	1	-

註 1) 第5表から別表にしたもの。

2) 国体は5回—24回までの集計である。

3) ( ) 内の数字はパーセントであり、小数点以下1位を4捨5入した。

第7表 投技の分類と頻度(高校の部)

技名	試合種別 (%)	全国 学校大会 高等	国 体	岩手 国体	和 嶺山 国体	総 計 (%)	順 位	技名	試合種別 (%)	全国 学校大会 高等	国 体	岩手 国体	和 歌山 国体	総 計 (%)	順 位
総 数		2,752	35	39	39	2,865	-	大外巻込		46	0	4	1	(2) 51	12
内 股	(2)	573	5	6	6	(21) 590	1	跳 巻 込		35	0	2	2		37
大外刈	(12)	341	6	1	9	(12) 357	2	移 腰		36	0	0	0		36
背負投	(12)	327	3	4	6	(12) 340	2	支釣込足		25	1	0	0		26
跳 腰	(7)	199	3	2	2	(7) 205	3	後 腰		20	1	0	0		21
払 腰	(6)	156	2	0	0	(6) 164	4	大 腰		18	0	1	0		19
釣込腰	(5)	149	0	0	1	(5) 150	5	巴 投		16	2	0	0		18
大内刈	(5)	146	3	0	1	(5) 150	5	すくい投		15	1	1	0		17
返し技	(5)	150	2	0	0	(5) 152	5	すかし技		15	0	0	0		15
体 落	(4)	109	0	1	1	(4) 111	6	肩 車		11	0	1	0		12
小外刈	(3)	92	0	0	1	(3) 94	7	双 手 刈		10	0	0	0		10
小外掛			0	1	0		浮 腰		5	0	0	0		5	
出足払	(3)	73	0	0	1	(3) 74	8	支釣込足		3	0	0	0		3
送足払			0	0	0		足 車		3	0	0	0		3	
払巻込	(2)	62	1	7	7	(2) 70	9	谷 落		2	0	1	0		3
大外落	(2)	53	4	6	2	(2) 65	10	裏 投		1	0	0	0		1
小内刈	(2)	60	1	1	3	(2) 65	11	朽 木 倒		1	0	0	0		1

註 1) 第5表から別表にしたもの。  
 2) ( )内の数字はパーセントである。小数点以下を4捨5入した。

従って表6・7から見た場合、大学における試合の「体落」を特いては、投技の総合整理した表5の傾向と変化が見られず、いずれも上位が「内股」・「大外刈」・「跳腰」または、「払腰」といった小数の技に集中されていることが特色であろう。なお、「極り技」数で、高校が33種、教員・一般・大学が共に28種で若干の違いが見られるが、「極り技」の範囲は広範囲にわたっていることは前述した通りである。

また、昭和20年以前の資料から分類したものが表8<sup>30)</sup>であるが、これと比較して見ると、つぎのことがいえる。

即ち今回の結果の順位は、表5でもわかるが列举すると、1位が内股、2位大外刈、3位背負投、4位跳腰、5位払腰、6位は3種類の技で、釣込腰・大内刈・返し技であるのに、昭和20年以前の結果である表8からでは、1位内股、2位大外刈、3位払腰、4位跳腰(跳巻込を含めた)、5位背負投、6位返し技の順にあげられ、「背負投」の順位で昭和20年以前の5位が今回3位に変わったこと以外には、その他の具体的な「極り技」においても余り変化がみられない。ただ昭和20年以前にみられなかった「すかし技」が、今回僅少であるが見られる。また、具体的に内容が明らかではないが、「返し技」が昭和20年以前・以後共上位に接近していることに興味を持たれる。

なお、「捨身技」の「巴投」もいずれにおいても僅少ではあるが使用されていることに、固技との関連で興味もたれるので、特に記しておきたい。また上位にあるものについては、両



第8表 戦前の投技の分類

順位	技名	(%)数	順位	技名	(%)数	順位	技名	数
1	内股	(16) 897	14	足払	(2) 132	27	裏投	8
2	大外刈	(13) 720	15	巴投	(1) 70	28	浮落	6
3	払腰	(10) 560	16	送足払	(1) 64	29	足技	6
4	跳腰 (含跳巻込)	(9) 510	17	巻込	(1) 61	30	大車	5
5	背負投	(8) 453	18	小外掛	(1) 60	31	浮技	5
6	返技	(7) 416	19	移腰	30	32	浮腰	4
7	釣込腰	(6) 349	20	出足払	26	33	手技	3
8	大内刈	(4) 230	21	大腰	24	34	双手刈	2
9	小内刈	(4) 207	22	腰技	23	35	蟹挟	1
10	体落	(4) 205	23	後腰	22	36	掬投	1
11	釣込足 (含払支)	(3) 163	24	膝車	18	37	抱上	1
12	大外落	(3) 158	25	肩車	11	38	隅落	1
13	小外刈	(3) 154	26	足車	10	39	釣腰	1

註 1) ( )内の数字はパーセントである。小数点以下1位を4捨5入した。

2) 昭和23年8月調査

3) 表4に基いたもの

者はほとんど変化が見られず、いずれも「内股」が断然群を抜いて最高のパーセントを示している。

「極り技」で常に「内股」が首位であることと、「大外刈」がこれにつづいていることが柔道の「極り技」の1つの特色でもあろうかと考えられる。しかし、これらのことは当然の結果であると、とらえるだけでよいものだろうかと考えさせられる点である。また投技で、今回34種に対して、昭和20年以前の39種で幾分減少しているがこの点についても大差がないことがわかる。けれども既述したように、昭和20年以前・以後と「極り技」の主力には、順位差が多少見られるが、少数の技に限られており、大差がなく、依然として強力な力によって相手を引きつけて投げる僅少の技が非常に高率であって、技術的に広さが少ないことがいえるのではなからうか。この傾向の分析も必要と考えられるが、今後の課題として残し角度をかえて検討を深めたい。

しかし頻度において高い程、勝負を決定する適切な技で、換言すれば、一般的には攻撃技であって防御し難い技といえる。

従って、以上の点を考慮の上、練習の重点をこのあたりの技においているともいえる。しかし、日本柔道が世界柔道にまで発展した現在、体格ですぐれている欧米人を相手にして試合が行なわれる機会も多いことから考えて、日本柔道界の立場から多少の不安を感じないわけではない。

得意技とその順位について、つぎのような報告<sup>21)</sup>がある。総計901のうちその上位6つをあげると、1位背負投(14%)、2位内股(14%)、3位体落(10%)、4位大外刈(10%)、5位払腰(10%)、6位跳腰(7%)で比較的大技が多く、逆に「大内刈」、「足払」、「小外刈」といった小技は各人の得意技の2・3番に位し、固技はほとんど得意技として記録されていない。

また得意となった因子では、自分の体格（主とし身長、体重）に起因するものが多く、つづいて最初に覚えた技、試合・乱取で効果をあげた技、上級生・指導者の得意技・最もかけ易い技等の順に多く、特に最初に覚えた技と答えていることが注目すべきことであろうと考えられる。

即ち初心者に柔道の技が指導される際、かなり早い時機に「背負投」が指導されている実情と考え合わせると、この調査における得意技の順位で「背負投」が第1位であることは全く無関係ではないと考えられる。

また「背負投」・「内股」・「大外刈」・「大内刈」・「小内刈」・「一本背負」・「釣込腰」の7種類をそれぞれ得意とする選手と体格・運動能力との相関では、まず「背負投」を得意とする選手は、身長・体重・胸囲とも平均より低く、小柄な者が多いが、運動能力が平均より上回っており、両者のバランスがとれて発達しているが、特に懸垂、敏捷性、瞬発力がすぐれているが目立っている。

つぎに、「内股」を得意とする選手は、身長・体重・胸囲とも他の選手より上回っており、体格面では均整がとれている。能力面でも筋力を除けば全般的に平均よりすぐれており、調和的な発達性を示している。

「体落」を得意とする選手は、「背負投」を得意とする選手と似た傾向にあるが、体格面でややすぐれ、能力面で劣っている。

「大内刈」・「小内刈」・「釣込腰」を得意とする選手は、体重・胸囲に比べて特に身長が低く、能力面ではほぼ平均に発達を示している。

「一本背負」を得意とする選手は、「体落」を得意とする選手と大体似た傾向にある。

これは昭和39年度大阪における高等学校選手権大会に出場した480人の選手に対しての調査結果だけであるが、得意技と運動能力の相関を除いては、一般的に考えられていることが示されていると考えられる。参考にすべき点が多い。

また今回の調査については前述したように、「極り技」の頻度においては、かなり高低が大

第9表 投 技 の 区 分 と 頻 度

技 名		学 校					技 名		学 校				
		高校	大学	教員 一般	合計	%			高校	大学	教員 一般	合計	%
手 背 負 投 落 計	背負投	340	2	12	354	足	内股	590	12	32	634		
	体落	111	7	7	125		大外刈	357	13	11	381		
	計	451	9	19	479		15.5	大内刈	150	3	2	155	
腰 跳 込 釣 込 送 移 大 後 計	跳込腰	205	1	10	216	技	小外掛・小外刈	94	5	8	107		
	込腰	168	6	17	191		大外落	65	1	12	78		
	釣込腰	150	2	7	159		出足払・送足払	74	1	2	77		
	込送腰	70	3	4	77		大外巻込	51	2	6	59		
	移腰	36	0	2	38		小内刈	65	0	3	68		
	大後腰	19	1	2	22		支釣込足	26	0	4	30		
計	669	13	44	724	23.4	計	1,472	37	80	1,589	51.5		

註 1) 投技の「極め技」の総合から勝数20本以上のものを整理分類したもの。  
 2) %は小数第2位を4捨5入した。  
 3) 捨身技における勝数は20本未満である。

きいが、技の範囲が驚く程広いことがいえる。これは人間の身体的適性が柔道の「極り技」に対して如何に多彩であるかを示すと同時に、技の指導の重要さは、その適性化にあることを意味するものであろう。また、頻度において僅少でも各種の技が発揮されていることは、平常の練習の現われであり、練習によっては可能性が十分あることになる。従って技の指導の広さが重要であるといいたい。

さらに、調査結果を総合整理した表5から「極り技」で20本以上になっているものだけを拾いあげ整理すると、次の表9のように手技、腰技、足技に区分され、捨身技では「巴投」を除いてはほとんど見られなかったので表中から除いた。捨身技がいかにもむずかしいかが理解される。これによると足技51.5%、つづいて腰技23.4%が、主力的な働きをみせている。また足技が過半数を占めているのは、柔道の投技の種類では足技が一番多く、且つ、現行の試合規定が前述したように、投技を主体にしてなされていることや、投技の場合の姿勢が常に両足に支えられているという身体的な特性によるものと考えられる。

また、昭和27年度実施の各種大会の整理結果<sup>22)</sup>では、足技50%、腰技27%、手技13%、捨身技3%となっているが、足技の高率と捨身技のきわめて低率である傾向については、昭和25年以後においても何等変化をみせていないことが知られ、捨身技の低率な傾向に対しては、むずかしい技であるというだけで済ませてよいのか、あるいは不利に展開する場合が考えられるから低率であるのか、他にどのような理由があるのか、どのように判断してよいのか、そのとらえ方に苦しむ。

#### ロ) 固技について

「極り技」の本数の多い順に整理したものが表10である。また、使用された技の合計は、1,087本でありその中で、抑込技10種、絞技6種、関節技4種の20種に及んでいる。但し、同傾向の技は、総合整理の段階で一つの技として整理した。

さて、表10から見ると、投技と同様如何なる技が試合に多く使用されていることがよくわかる。

抑込技・関節技・絞技別にみると、抑込技は77%、絞技は15%であり、関節技がわずかの7%で最下位となり、抑込技が断然高率を示しており、その内容は上位を見ると「けさ固」22% (235本)、「崩上四方」19% (210本)、「絞技」15% (165本)、「横四方固」15% (163本)、続いて「上四方固」9% (100本)の順に使用されている。

既述したように固技で勝負が決定した総数1,087本の中で、高校が96%を占め、大学・教員・一般はきわめて僅少である為、区分して比較検討することは、問題も残るが、学校別に整理した表11・12から見ると高校の順位は、「けさ固」22%、「崩上四方固」19%、絞技全体で15%、「横四方固」15%、「上四方固」9%、「たて四方固」8%となっており、固技の総合整理結果の表10とほとんど同傾向を示している。これは前述した通り固技の総合整理結果の96%が、高校で占められれていることが、大きく影響した結果と見るのが妥当であろう。

一方、大学では、固技で勝負が決定したものの44本の中で使用された技の種類が13種、高校と比べて勝負が決定した本数、並びに技の種類は共に僅少である。内容においては、「崩上四方固」が25%と高率を示している。

教員・一般では勝負が決定したものの36本の中で使用された技の種類が13種で、大学同様きわめて僅少である。

内容では、「崩上四方固」25%、「横四方固」、「腕挫十字固」14%、「けさ固」8%で大学、教員

・一般においては、共通して「崩上四方固」が首位を占めていることが、興味ある現象である。

なお、大学、教員・一般の首位である「崩上四方固」と、高校の「けさ固」の首位との違いが面白い現象であるが、その要因等を究明することは今回の調査研究の主旨でもないので、幾多の条件等を細かに把握し、観点をかえて試みるのが妥当と考えられるので、今後の課題として残し、検討を深めたい。

ただ、一般的に投技同様に力を必要とする「けさ固」、「崩上四方固」の高率さと、技術的にはそれ程高度であるとは考えられない絞技、関節技の低率さが、高校、大学、教員・一般に共

第10表 固技の分類と頻度(総合)

試合種別 技名	全大 国高 会 等 学 校	国 体	岩 手 国 体	和 歌 山 国 体	計	一 般 ・ 教 員 体	岩 手 国 体	和 歌 山 国 体	計	大 学	総 (%) 計
総 数	1,004	11	12	16	1,043	4	21	11	36	8	1,087
け さ 固		1	1	0		0	0	3	3	0	
崩 け さ 固	219	3	3	0	228	0	1	0	1	1	(22) 235
後 け さ 固		0	0	1		0	1	0	1	1	
崩上四方固	191	3	2	3	199	2	5	2	9	2	(19) 210
裸 絞		0	0	0		0	0	0	0	1	
襟 絞		1	0	3		0	2	0	2	1	
片 羽 絞	152	0	1	0	159	1	1	0	2	0	(15) 165
十 字 絞		0	0	0		0	0	0	0	0	
送 十 字 絞		0	0	1		0	0	0	0	0	
三 角 絞		0	1	0		0	0	0	0	0	
横 四 方 固	151	1	2	3	157	1	1	3	5	1	(15) 163
上 四 方 固	94	1	0	2	97	0	2	0	2	1	(9) 100
た て 四 方 固	81	0	0	0	81	0	2	1	3	0	(8) 84
腕 挫 十 字 固	41	1	0	3	45	0	4	1	5	0	(5) 50
崩 横 四 方 固	32	0	1	0	33	0	0	1	1	0	(3) 34
腕 絞	15	0	1	0	16	0	0	0	0	0	(1) 16
肩 固	13	0	0	0	13	0	0	0	0	0	13
脇 固	6	0	0	0	6	0	2	0	2	0	8
腕 挫 膝 固	7	0	0	0	7	0	0	0	0	0	7
崩 た て 四 方 固	2	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2

註 1) 一般・教員の部で

国 体 156試合(5回-24回)

岩手国体 282試合

和歌山国体 274試合である。

2) ( ) 内の数字はパーセントであり、小数点第1位を4捨5入した。

第11表 固技の分類と頻度 (学生・教員・一般の部)

試合種別 技名	国 体	岩手 国体	和歌山 国体	計 (%)	順 位	大 学 (%)	順 位	総 計 (%)	順 位
総 数	4	21	11	36	-	8	-	44	-
崩上四方固	2	5	2	(25) 9	1	(25) 2	1	(25) 11	1
横四方固	1	1	3	(14) 5	2	1	2	(14) 6	2
腕挫十字固	0	4	1	(14) 5	2	0	-	(11) 5	3
上四方固	0	2	0	2	4	1	2	(7) 3	4
けさ固	0	0	3	(8) 3	3	0	-	(7) 3	4
送襟絞	0	2	0	2	4	1	2	(7) 3	4
たて四方固	0	2	1	(8) 3	3	0	-	(7) 3	4
片羽絞	1	1	0	2	4	0	-	2	5
脇固	0	2	0	2	4	0	-	2	5
崩けさ固	0	1	0	1	5	1	2	2	5
後けさ固	0	1	0	1	5	1	2	2	5
崩横四方固	0	0	1	1	5	0	-	1	6
裸絞	0	0	0	0	-	1	2	1	6

註 1) 表10から別表にしたもの

2) ( ) 内の数字はパーセントである。小数点以下は切捨とした。

第12表 固技の分類と頻度 (高校の部)

試合種別 技名	全学校 大会 (%)	国 体	岩手 国体	和歌山 国体	総 計 (%)	順 位	試合種別 技名	全学校 大会 (%)	国 体	岩手 国体	和歌山 国体	総 計 (%)	順 位
総 数	1,004	11	12	16	1,043	-	上四方固	(9) 94	1	2	3	(9) 97	5
けさ固		1	1	0			たて四方固	(8) 81	0	0	0	(8) 81	6
崩けさ固	(22) 219	3	3	0	(22) 228	1	腕挫十字固	(4) 41	1	0	3	(4) 45	7
後けさ固		0	0	1			崩横四方固	(3) 32	0	1	3	(3) 33	8
崩上四方固	(19) 191	3	2	3	(19) 199	2	腕 緘	15	0	1	0	16	-
送襟絞		1	0	3			肩 固	13	0	0	0	13	-
片羽絞		0	1	0			腕挫膝固	7	6	0	0	7	-
裸絞	(15) 152	0	0	0	(15) 159	3	脇 固	6	0	0	0	6	-
十字絞		0	0	1			崩たて 四 方 固	2	0	0	0	2	-
逆十字絞		0	0	1									
三角絞		0	1	0									
横四方固	(15) 151	1	2	3	(15) 157	4							

註 1) 表10から別表にしたもの

2) ( ) 内の数字はパーセントであり、小数点以下は4捨5入した。

通していることが注目したい点であり、かつ、前述のように世界柔道という観点からみても、さらに検討しなければならない点であろうと考えたい。

それにつけても、前後左右に動きの機敏性を生かしながら、もっと機会をとらえ、力にのみよらず、瞬間的に勝負を決定し得る絞技、関節技等の技の特質を生かした試合方法の研究が平常の練習において必要であろうといえる。これを実現するためには、絞技、関節技の性格を把握すると共に、練習者個々の身体的特性を考慮の上、両者の合理的な実用の観点に立った指導をすることこそ低率な技を高率にし、問題とされる「引分」の高率を解消する所以ともなるであろうと考えられる。

かつて、筆者は、次のことを報告した<sup>23)</sup>。体重の大小別の勝割合で、体重が大の場合は56%で、体重が小の場合は26.4%であること。身長の大小別の勝割合では、身長が大なる場合は49.2%で、身長が小の場合では35.6%の勝割合で矢張り大差があること。一方、身長・体重共大なる場合は、71.8%の勝割合を示し、前述の場合より、相当に勝割合が高率であり、体格のすぐれていることは、勝負に圧倒的に有利な影響を及ぼしている。

しかしながら、反面体格の劣っている者の場合でも、約30%の勝割合を示していることは、注目すべき点である。また、身体的特色を生かした投技の選択と絞技・関節技の研究と、その実用化が特に必要であることを報告した。

なお、高校の全国大会に出場した選手の身長・体重の状況を整理したものが12表である。し

第12表 高校選手の身長と体重

昭和	身長				体重			
	159cm以下	最 小	最 大	平 均	59kg以下	最 小	最 大	平 均
28	-	152	178	166.8	55	49	80	64.2
29	-	152	183	167.5	29	52	101	65.8
30	-	155	184	169.0	14	57	95	67.1
31	-	152	181	169.0	7	54	95	69.2
32	-	155	180	169.1	9	56	100	69.6
33	8	155	185	168.9	5	54	103	69.9
34	5	157	190	172.0	4	58	99	70.3
35	6	156	187	168.4	16	52	115	69.5
36	6	150	181	168.9	16	50	130	70.1
37	6	154	190	170.3	12	55	112	70.4
38	7	155	191	170.3	7	53	118	70.5
39	5	155	188	170.8	22	52	118	72.3
40	2	157	185	171.4	7	54	115	73.7
41	1	158	186	170.4	11	55	115	73.9
42	0	160	190	170.3	9	57	125	73.7
43	3	156	188	171.8	6	57	131	74.5
44	2	157	185	171.9	13	55	135	74.2
45	1	159	196	174.6	14	53	130	75.7

- 註 1) これは全国高等学校柔道大会に出場した選手に関する記録である。  
 2) 第19回全国高等学校柔道大会報告書による。  
 3) 昭和45年8月3・4・5日和歌山県立体育館における団体戦出場者の結果である。

たがって、先輩・指導者の得意技を真似するだけでなく、これを1つの参考として各自の体格の位置を知ることでもでき、得意技等の選択上の基準に出来ると考えられる。

特に、現行の試合方法でスポーツ柔道として、体重差を考慮しないで実施される場合が多い関係からして、体格のすぐれていない者が、体格のすぐれている者に対して勝利をおさめるためにも、また、柔道試合の興味を向上させるためにも、固技においては、関節技・絞技の熟練とその使用が最も合理的な方法といえよう。

ここに、試合方法の研究（審判規定の研究も含めて）と、それらの技の研究の余地が暗示されているものと考えたい。

次に、今回の調査結果と昭和20年以前の固技における傾向<sup>24)</sup>とを比較して見ると、昭和20年以前の抑込技では「上四方固」が断然高率で、絞技では「送襟絞」と「十字絞」、関節技では「十字固」が最も多い。また、固技で勝負の決定したものの中では、抑込技の67%が首位を占め、関節技の10%が最下位であった。

一方、今回の調査結果では、抑込技では、「けさ固」が高率で首位である点だけが昭和20年以前と比べての相異点であるが、今回の調査資料では、前述のように高校の試合資料が、約96%であった為にこのような違った傾向が生じたものとも考えられる。絞技は、整理のはじめから1本にまとめた関係上、明確にとらえることが出来ず、今になって分割整理しておけばよかったと反省しているが、整理の過程から「送襟絞」が多かった。

関節技では、「腕挫十字固」が最も多く、昭和20年以前の傾向と特に目立った変化として取り上げるものが認められない。

いわゆる、勝負の決定したものの中では、前述した投技と同様に、一般的に力を必要とする抑込技が首位を占め、瞬間的に勝負を決定し得る関節技が、最下位であることは、昭和20年以前と以後を通じて同傾向にあることがいえる。したがって、関節技、絞技についての研究がおろそかにされていることを認めざるを得ない。

## ま と め

調査対象の試合数 10,217のうち高等学校の試合数が約91% (9,323試合)であって、高校の試合結果の傾向色が極めて強いが、以上の結果と考察から導き出される主要なる総括結果は次のようなものである。

1) 審判規定が勝負の内容を規定する大きな要因である。

表1における優勢勝は10,217試合のうち21.2% (2,169本)であるのに、表4における優勢勝(判定で勝負がついたもの)は勝負がついた試合数8,772試合の中で10% (835本)であって、今回の調査結果が約2倍に上回っている。これは判定基準の改正による結果と考えてよいだろう。

また表1における大学の部の団体戦(学生優勝大会)における106試合の中で53.8% (57試合)が「引分」で極めて高率である。この傾向は、特に審判規定の改正による判定基準をそのまま適用をせず異なった基準を適用した結果と考えられる。したがって、規定の適用の如何が勝負の内容に大きく影響するものとみることが出来る。また、審判規定の研究と適正な適用化は柔道に対する興味発展の立場からいってもゆるがせにできないと共に、規定の研究は技術指導の重要な役割りを果すものとして重視しなければならないと考えたい。

2) 「引分」の高率が目立ち試合に対する態度指導の必要が考えられる。

表1・2・3・4からみてもわかるが、表4の「引分」17%に対し、表1では全体として30.2%、さらに、細部についてみると高校の29.2%、教員・一般の43.5%、大学53.8%でいずれも高率であるが、特に、大学の「引分」が高率であることは、勝負の判定基準が他の試合の場合と異なることが影響していると考えられる。それにしても、この高率な「引分」の状態は異常と考えたい。

最近柔道に対する興味（観衆も含めて）が停滞、若しくは減退しているといわれている要因が、この辺にあるのではなからうかと考えられ、柔道の新たな将来の発展のために、ただ旧を守るにとどまらず、一歩進めて、本気で考究してみなければならないと考えられる。

3) 技の性格と身体的特性を考慮した指導が必要と考えられる。

表5・6・7からみてもわかるが、投技における「極り技」数がそれぞれ34・27・33種類と広範に亘っているにもかかわらず、頻度10%以上のものは、一般的に力を必要とする大技である「内股」・「大外刈」・「背負投」又は「払腰」といった極く少数の技に集中されている。

また、固技の傾向を表10からみると「極り技」19種類、表11では13種類、表12では20種類と投技と同様に広範囲に亘っているといえるが、頻度10%以上の技は、「けき固」、「崩上四方固」、1つにまとめた絞技が、含められるにしても「横四方固」、といったほとんど力を必要とする少数の技に限定されているといえる。この傾向も昭和20年以前の傾向と差がない。いわゆる体格が優れている者に有利と考えられる技のみである。しかし、現実的に数多い技の中で、各自の体格・能力・性格・練習・環境等の諸因子によって、習得し得る技、そして熟練し得る技というものは、ある程度限定されてくるであろうし、また、限定されたものの中から、さらに、自分に最も適した技を選び、それを得意技として育成していかなければならない筈である。

いずれにしても、柔道を練習する際には、得意技を作ることは非常に大切なことは当然なことである。

なお、柔道を練習する場合、できるだけ多くの技を習得し、相手に応じ、場に応じ、変化に応じて各種の技を使いわけるところに柔道の意義があると考えられる。今回の調査結果では現実的に体格に優れている者に有利と考えられる少数の技が、頻度において上位にあることを考える時、身体的特性に応じた技の指導研究が十分とはいえないのではなからうか。

そこで、体格において劣っている者でも、勝利をおさめ得る投技の選択、練磨に心がける必要があるとともに、ここでは絞技・関節技の研究が重要であることを重ねて強調したい。

勿論柔道は、練習・試合過程が大事であることは当然であって、決して勝利主義を最終目的としていないことを念のために附記しておきたい。

4) 「巴投」の研究指導を重視すべきである。

表5・6・7からみてもわかるように、「巴投」の頻度が極めて低率である。また、固技における絞技・関節技も意外と低率さを示していることは、既述した通りである。

なお、投技・固技とも前述したように一般的に体格の優れている者に有利と考えられている極く少数の「極り技」で占められている。このような傾向からみて、体格の劣っている者でも勝利をおさめるためには、他に色々と技があろうが、特に「巴投」の研究で絞技・関節技の機会に連結させることによって、低率な「極り技」を高率に変えることが可能であろうと考えた



い。したがって、絞技・関節技との関連で巴投の研究と指導の重要性を強調したい。

5) 「返し技」・「すかし技」の研究指導を重視する必要がある。

表5・6・7並びに表8からみてもわかるように、投技で頻度の上に「返し技」が接近している。また、「すかし技」は表8（昭和20年以前）にはみられず、今回の調査結果に僅少ではあるがみられる。これらの技は色々と研究した結果の成果の現われであろうと特にとりあげたい。これらの技は従来から攻撃的な技でなく、消極的な技として、余り顧みられない傾向にあるが、相手の攻撃に対して「後の先をとる」といわれる極めて積極的な技と考えたい。ただ、これらの技は一般的に相当の高度な練習者において効果を期待することができるものであると考えられている。また、試合における勝利が柔道の技術的發展をもたらす手段であると考えられるので、適切な研究と指導によっては必ずしも高度な練習者でなくても効果を発揮する可能性が十分あるものと考えられる。従って適切な指導研究が特に必要となる。しかもその指導結果が効果を発揮するようなことがあれば、今後の柔道試合においては、機敏さが増大し、柔道に対する魅力も一段と増大されることが明らかであろう。

なお、本調査研究は柔道の技術に関する研究の一環であるが、決して完全なものではなく、幾多の問題が残されていることを念のため附記しておく。

最後に、本研究に対して資料を提供して下さいた岩手県高等学校体育連盟理事長の矢羽々通夫先生、並びに同柔道専門部長の三田健二郎先生に対して、深く誌上をかりて感謝する次第である。

## 参 考 文 献

- 1) 老松 信一：「柔道百年」，昭和45年7月，p. 470. 時事通信社
- 2) 第25回国民体育大会秋季大会柔道競技試合成績速報，昭和45年10月，久慈体育館
- 3) 第26回国民体育大会秋季大会柔道競技試合成績速報，昭和46年10月，松下体育館
- 4) 老松 信一：「柔道百年」，昭和45年7月，p. 481. 時事通信社
- 5) 第25回国民体育大会秋季大会柔道競技試合成績速報，昭和45年10月，久慈体育館
- 6) 第26回国民体育大会秋季大会柔道競技試合成績速報，昭和46年10月，松下体育館
- 7) 老松 信一：「柔道百年」，昭和45年7月，p. 499. 時事通信社
- 8) 第25回国民体育大会秋季大会柔道競技試合成績速報，昭和45年10月，久慈体育館
- 9) 第26回国民体育大会秋季大会柔道競技試合成績速報，昭和46年10月，松下体育館
- 10) 11) 老松 信一：「柔道百年」，昭和45年7月，p. 541. 時事通信社
- 12) 全国高等学校体育連盟：「全国高等学校柔道大会報告書」，昭和46年8月，愛媛県立武道館
- 13) 大滝 忠夫：「柔道十講」，「上」p. 103. 昭和38年10月，不味堂書店
- 14) 磯貝 一：明治武道史「柔道手引草」，昭和46年7月，新人物往来社
- 15) 小田常 削：「柔道大観」，上・下巻 昭和6年5月，尚志館出版部
- 16) 大滝 忠夫：「柔道十講」，「上・中」昭和38年10月，不味堂書店
- 17) 工藤 一三：「柔道の技法」，投技編・寝業編，1968年12月，日貿出版社
- 18) 小谷 澄：「柔道」，昭和44年3月，成美堂出版
- 19) 大滝 忠夫：「柔道十講」，「上」p. 104. 昭和38年10月，不味堂書店
- 20) 大滝 忠夫：「柔道十講」，「上」p. 105. 第2表 昭和38年10月，不味堂書店
- 21) 金芳 保之：「第7回研究調査報告書」，昭和40年，全国高等学校体育連盟柔道部
- 22) 大滝 忠夫：「柔道十講」，「上」p. 108. -109. 第5表 昭和38年10月，不味堂書店
- 23) 金田一芳美：「柔道における体格がその勝負に及ぼす影響についての研究」，昭和40年10月，岩手大学教育学部研究年報第25巻
- 24) 大滝 忠夫：「柔道十講」，「上」p. 106. 昭和38年10月，不味堂書店 （昭和47年5月30日受理）